教育・研究ノート

大学体育つれづれ

産業医科大学　市川孝夫

戦後50年を経過した大学体育は今、大きな転機を迎えている。終戦の疲弊した時代に、日本の復興は日本人の体力と気力、そして知力を復興することにあった。その期待を担った大学体育は、施設不足、指導者不足、予算不足の絶望的な状況の中から立ち上がり、日本の繁栄を支える人づくりに貢献してきた。社会の復興と繁栄の中で体育に対する評価は変わり、マスプロ教育の弊害の代表として長期間にわたり大学体育不要論が繰り返されてきた。それは実験実習科目でありながら一般教育科目の大教室講義と同様な指導学生数が割り当てられ、不備な指導体制を半ば強制された教育現場に対する評価であった。

進学率の向上、就学人口の増加から、駅弁大学の流行語を生むまでに大学の新設が爆発的に行われた。その結果、指導体制、施設整備、安全管理の不備から来る不完全な教育が行われたことは否定できない。時代の要請とはいえ無定見に近い大学新設に責任の一端がある。

今、時代は無軌道な若者への対応に苦慮している。大学生といえども「キレル」学生は少なくない。大学教育は知的基礎体力の向上を目指しながら、脳を限りなくコンピューターに近づける教育を実践している。この中では失敗や挫折からの心身の成長発達の学習は困難と見られる。コンピューターでは心の教育は不可能である。現在の教育の中で、失敗や挫折の中から心身の成長発達の学習戦略を備えている体育・スポーツ学習は、独創性を生み、成功と感動の喜びを得る貴重な教育として「体育教育」の再評価が必要である。

大学教育の中で肉体的基礎体力を育成し同時に豊かな感性と人間性を身につける体育教育は人間学としても貴重な価値がある。大学体育には、質的にも量的にも現代の学生が必要としている肉体的基礎体力の向上、更には豊かな感性と人間性を身につけた21世紀の担い手の育成の中心となるように期待したい。

・大学生の体力

定期的に発行される大学体育連合「体力測定結果調査報告書」によれば、学生の形態は年々向上しているが機能面では低下傾向にある。特に筋力、持久力に低下が見られる。他の報告によれば生活面での夜型傾向、更に食生活の不規則、栄養バランスの乱れから憂慮すべき健康の現状が報告されている。社会に出れば改善されると楽観視はできない。少なくとも大学初年度から生活スタイルの改善、肉体的基礎体力の獲得を実践的教養として身につけさせる必要を痛感する。

国際的な活動をするスポーツ選手でも、外国選手と比較すると小食傾向の日本人学生と食欲旺盛に食事に立ち向かう外国選手とは競技成績に比例している。競技の世界でも日本人学生は一般学生の食と同傾向を示している。日本人の競技成績の向上の最重点が食の改善であることは明白である。

体力レベルでは日本人学生が外国の学生と互角の競争にならないことを自覚し、健康と体力・食行動を客観的な視点から再教育する必要がある。

・21世紀型人間に必要な健康・体力

猪飼道夫の体力の概念に示されている行動体力と防衛体力（抵抗力）を兼ね備えることが21世紀型人間に必要な体力である。

企業戦士は21世紀には益々活動範囲が広がる。時差は勿論、緯度、経度、高度、気圧、温度差、乾燥等自然環境に対する高い適応能力が要求される。現在この要件を体験し身に付けている者は国際的に活躍しているスポーツ選手である。21世紀型人間の適応能力の開発・指導ができるのはスポーツ選手を指導している体育スポーツ指導者であろう。大学の体育スポーツ指導者は極めて有能な21世紀型人間育成の最適任者といえる。

現在の若者は汗を流すことを嫌い、逞しい身体を忌避する傾向にあるが、研究結果からも「運動習慣のあるものは免疫機能が高まり病気にかかりにくい」と証明されている。

広い世界を求めるか、狭い世界を求めるかは若者の選択であるが、世界の先進国の若者達は広い世界を目指し行動している。運動は、「自らの生命力を高め、世界を広める人間の基本的な行為である」という認識

を身につけさせ、世界の若者に伍して生きていく力を身につけさせる必要がある。

・スポーツ選手と大学研修者の交流

シドニーオリンピック代表のA選手が、NHK 記者とのインタビューで大学体育関係者にとって衝撃的な発言をした。

アナ：「A選手は1週間にウエイトトレーニングを何日行いますか」

A選手：「毎日行います」

アナ：「一般にトレーニング理論では1日おきとか、週3日の実施がよいといわれていますが」

A選手：「一般論はトップクラスの選手には当てはまらない、大学の研究者が一般的な競技者や、学生を対象にしたデータから作られた理論は当てはまりません」

と見ごとに一蹴された。

トップクラスの選手は大学の研究者の対しこのような評価をしている。これはA選手と研究者との関係だけでなく、日本の大学スポーツ選手と研究者との関係にもみられ、深刻な実態が存在すると受け止めた。

この言葉から思い起こすと、私は過去に「大学の体育教室は、体育、スポーツの最高の図書館で、あらゆる情報と技術の宝庫である」と述べ学生と体育教員の積極的な交流を促したが残念ながらその改善の姿は見られない。

大学教員が、スポーツクラブ指導に最新のスポーツ科学研究成果を持ち込み実践指導することは、学生にとっては新鮮であり活動意欲を沸かせてくれる。その環境の中から更に密度の濃いスポーツ科学の成果を期待したい。今、大学体育教員は学生の求める高いレベルの活動にどう深くかかわる意欲があるかを問われている。トップクラスの選手集団と冷めた関係になることは避けなければならない。

・終わりに

体育・スポーツは人間と密接に関る行為であり、地位や財産、仕事と直接利害関係を持たない世界（非日常的関係）を形成している。唯一、人間が自分をさらけ出し自由に付き合えるものでもある。某大学で最も人気のある先生が、学長や教授ではなく、また講義内容の評価でもなく、学生の校内マラソン大会参加の先生であったということはスポーツの持つ象徴的な現象である。コンピューター時代、人間が求めるものは「失なわれた人間関係の回復」である。大学体育指導者は、科学的研究成果の報告は勿論であるが、現代の学生の肉体的レベル、技術的レベル、人間関係レベルに目線を落とし血の通った指導への挑戦が必要である。学生が存在するから大学教員であり得るのであり、学生を忘れた大学教員は存在できないことも肝に命じる必要がある。

現在、世界で文明の高度に発達した国では、最先端科学が主導するが、その基盤は健康な肉体の持ち主で構成された健康な社会である。成長発育過程での学校体育、成人後の社会体育・健康づくり・更に生涯スポーツ活動に「体育スポーツ」は必要不可欠の関係にある。そのような社会の中で我々は体育人として国民の期待に応えるよう、理想と誇りを持って教育・研究・指導に励まなければならない。

海外だより

サンシャインコースト大学事情

大分県立芸術文化短期大学　洲　雅明

１．サンシャインコースト大学について

平成11年９月末から平成12年３月末まで、オーストラリアへ在外研究を行う機会を得ました。そのうち４ヶ月間をサンシャインコースト大学で過ごしました。サンシャインコーストは、クィーンズランド州都であるブリスベンの北100キロのところにあります。周辺には数々の美しいビーチがあり、大変自然環境に恵まれたところです。ここでのテーマは、「海や川を中心としたスポーツ環境と安全」ということで調査研究を進めました。

この大学は、オーストラリアで最も新しい国立大学として1997年に開学し、最初の卒業生を送り出したばかりです。学部は、Art、Science、Business の３学部で、学生数は現在約3,000人ですが、将来的には２万人規模の総合大学となる予定です。この大学のカリキュラムは少し変わっていて、卒業に必要な単位は３年間で履修でき、２つの学部で２つの学位を最短４年間で取得できます。モダンな建築物の校舎が芝生の間にゆったりと配置され、毎日野生のカンガルーが現れる程のどかです。他の組織としては図書館とインフォメーション・テクノロジー・サービスがあり、そこを中心に大学内は完璧にネットワーク化されています。

スポーツや体育関係の講座としては、Art 学部に「More Than a Game」、Science 学部に「Exercise Physiology」、「Environmental health」、Business 学部に「Sport and Event Marketing」などの講座があります。その中で Science 学部の「Exercise Physiology」と「Performance Enhancement」という講座を聴講させてもらいました。これらの授業には、20名あまりのスポーツサイエンス専攻の学生が受講していました。教室での講義と実験室でのプロジェクトという構成で、60～90分程プレゼンテーション用ソフトを用いた講義が行われ、その後実験室でグループ別にトライアスロン選手の心肺機能の測定や筋出力の測定を行っていました。施設・設備に関しては、新設のせいか十分なものとはいえず、この実験室もラグビーグランド横のクラブハウス内に仮設されたものでした。その他スポーツ施設は、陸上競技場はありますが、他にはビーチバレーコートが１面あるだけで、体育館などはありません。大学横の学生宿舎にはテニスコートとプールがありますが、レクレーション用です。

教養教育的な授業は、ほとんど開講されておらず、

少人数のゼミ形式の授業が中心でした。特殊な授業としては「Surf Life Saving」があります。この授業は、ライフセービング協会が認定している資格と関連していて、学外での受講が主です。その内容は、救助法、ビーチや施設のマネジメント、環境保護、サーフスポーツなどに及びます。今回、この地域で盛んなサーフライフセービングを中心に、水に関する安全やプログラムについて調査を行いました。

2．サーフライフセービングについて

サンシャインコーストには、50キロのビーチの間に15のサーフクラブがあり、その活動が盛んな地域です。サーフクラブにはレストランやバーがあり、地域住民の社交の場となっています。年間1,500円程度の会費がビーチの安全のための資金源になります。そこには、レスキューボードやサーフスキー、IRB（Inflatable Rescue Boats）を収納する艇庫もあり、サーフライフセービングの拠点になっています。この他には、心肺蘇生法などの講習会を開催できるルーム、ウェイトトレーニングルームなどがあります。

ビーチへの入り口には、ビーチでの諸注意とともにビーチに立っているフラッグの説明が、英語表記とともに日本語表記でも書かれています。海で溺れる大半は観光客で、その内日本人が占める割合がかなりいるそうです。それにフラッグの意味を知らないまま泳ぐことから起こる事故が多いそうです。フラッグは５種類あり、上半分が赤で下半分が黄色のフラッグが、「旗と旗の間で泳いでください」、緑のフラッグが「水泳に安全な場所」、黄色のフラッグが「気をつけて泳いでください」、赤のフラッグが「危険！水泳禁止」、青のフラッグが「モーターボートやサーフボードは旗の外でご使用ください」の意味を示し、状況に応じてライフセーバーが立てます。ビーチにはライフセーバーが、監視塔の中、テントの中、ビーチ上に適当な間隔で、そして海の中でもレスキューボードに乗って監視を行っていて、赤と黄色のＴシャツで一目瞭然にライフセーバーとわかります。海水浴客にはビーチコンディションがわかるように、満潮、干潮の時刻、天候、風向き、ビーチの状態、リップエリア、気温、水温、パトロールの時間帯などがボードに記入してあります。

ビーチパトロールは、クィーンズランド州で９月中旬から５月上旬まで、朝７時半から夕方４時半まで実施されていますが、夏場や土日は延長して行われているようです。サンシャインコーストで一番大きなサーフクラブには、ライフセーバーが250人も登録していているそうです。ニッパーと呼ばれる子供も350人程登録していて、サーフスポーツを行いながら安全教育が行われています。

このように、海でのレジャーがとても盛んな地域なため、昔から自分たちのビーチの安全を確保したり、そのための教育がとても盛んに行われていました。これらの安全教育やアクアスポーツが盛んなのは、他の地域のプール環境を見てもよく理解できました。AUSTSWIM という初心者指導と安全プログラムの講習会が盛んに行われていて、各プールにはこの資格を持った指導員がいます。これらの指導員の元、足のつかない深いプール、飛び込み台、ウォータースライダーやウェーブの起こるレジャープールなど、子供たちが遊びながら水中における安全を身につける環境が整っていました。大半のプールは、早朝６時前から夜８～10時まで利用可能で、オリンピックが開催されたシドニー・アクアテック・センターは、イベント利用、健康スイマー、親子遊泳など連日たくさんの利用者がいました。このようなシステムは日本でも参考にされているようですが、ここで学んできたことをさらに今後の安全教育などに活かしていくことができればと思っています。

大学めぐり

鹿　児　島　大　学

鹿児島大学　長　岡　良　治

鹿児島大学の沿革

本学は郡元キャンパス、下荒田キャンパス及び桜ケ丘キャンパスからなり、郡元キャンパスには教育・法文・理・工・農の５学部があり、下荒田キャンパスには水産学部、桜ケ丘キャンパスには医・歯学部がある。郡元キャンパスと下荒田キャンパスは鹿児島市の中心部に位置し、地域に根ざした教育、文化、研究の発信基地としての役目を果している。

本学の歴史は、藩学造士館の流れをくむ旧制第七高等学校、鹿児島師範学校及び鹿児島女子師範学校の流れをくむ鹿児島師範学校、県立実業補習学校教員養成所の流れをくむ鹿児島青年師範学校、鹿児島農林高等学校の流れをくむ鹿児島農林専門学校及び県立商船学校の流れをくむ鹿児島水産専門学校を母体として、昭和24年に文理・教育・農・水産学部が創設され、当初４学部でスタートした。その後、昭和30年に医学部と工学部が県立から国立に移管・増設され、昭和40年に文理学部改組により法文学部、理学部、教養部が新設された。昭和52年には歯学部、昭和60年には医療技術短期大学部が設置された。そして平成９年より教養部が廃止され、８学部が改組・充実された。

全学の附属施設として、附属図書館、保健管理センター、地域共同研究センター、総合情報処理センター、遺伝子実験施設、多島圏研究センター、アイソトープ総合センターが設置されている。中でも附属図書館は中央図書館、桜ケ丘分館及び水産学部分館からなり、特に中央図書館は、国立大学に９館設置してある外国雑誌センター館の一つとして農学系雑誌を多数収集し、また、特殊文庫として島津久光及び島津玉里邸の旧蔵書である「玉里文庫」を所蔵している。

鹿児島ならではの多島圏研究センターは昭和56年設置の南方海域センター、昭和63年設置の南太平洋海域研究センターを母体とし、アジア太平洋の多島域について調査研究を実施し、学術の国際交流をはかってい

稲　盛　会　館

当会館は本学工学部出身の京セラ㈱名誉会長稲盛和男氏から科学技術を中心とした知的交流を促進するための場として本学に寄贈されたもので、日本を代表する著名な建築家安藤忠雄氏の設計によるものである。

る。

その他、学部の施設として、教育実践研究指導センター、附属病院、農場、演習林、牧場、大型練習船（かごしま丸、敬天丸）、南西島弧地震火山観測所があり、本学の教育・研究上の特徴をかたちづくっている。

教養部廃止と体育教官の移籍

平成9年に教養部から20名の教官が教育学部に移籍した。体育教官は８名全員が移籍し、語学教官７名と旧教育学部教官４名、計19名で生涯教育総合課程を新設した。教育学部は現在学校教育教員養成課程、養護学校教員養成課程及び生涯教育総合課程からなっている。新課程は地域生涯教育コースと健康教育コースからなり、健康教育コースは移籍体育教官８名と旧教育学部体育教官１名、計９名で運営している。健康教育コースでは養護教諭の養成と社会体育指導者の養成に主眼をおいているが、いづれも県内に競合する大学があり、いかに特徴を出すか鋭意努力しているところである。

共通教育の保健体育

体育・健康科学理論Ａ（２単位もの）、体育・健康科学理論Ｂ（１単位もの）、体育・健康科学実習Ｉ及びⅡ（いづれも１単位もの）を開設している。学部によって２～４単位必修であるが、いずれの学部も理論１単位と実習Ｉ１単位は必修としている。現在全学出動方式で共通教育を行なうことになっているが、担当コマ数のアンバランスが大きく、旧教養部教官の時間的、精神的負担は大きい。体育に関しては今後旧教育学部教官との調整により解決すべき点が多々あるが、まだ時間がかかりそうである。

授業内容

体育・健康科学実習Ｉは実習書の計画に沿って行なうが、その内容は実習や運動を安全に行なうための注意、体力診断テストによる各自の体力レベルの評価、種々の体操による調子づくり・からだづくり、筋力トレーニングによる健康づくり、自転車エルゴメータを使った有酸素能力の測定、ウオーキング・ジョギングの運動強度の評価法、基礎的動き（スポーツ活動に必要な基本動作を体験）、いろいろなスポーツ（主にニュースポーツ）であり、いくつかはレポートを提出することになっている。

体育・健康科学実習Ⅱはクラスによって異なるが、開設する種目はバトミントン、バレー、バスケット、サッカー、テニス、ソフトボール、スケート、ゴルフ、ニュースポーツ、卓球、トランポリンなどであり、種目を選択して受講できるようにしている。
理論の１単位分は実習と有機的に関連づけ、必修として必要と思われる内容に限定している。残りの１単位分の内容は担当教官に任せている。

実習Ｉに関しては他教科の教官及び学生からも好意的にみられているが、実習Ⅱに関しては今後内容ややり方等工夫しなければ、共通教育の見直しの際に支持を得られない可能性もある。

九州地区大学体育連合研修会

「体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」秋季研修会の概要

１）開催期日：平成11年９月３日（金）

２）会　　場：福岡工業大学（１号館２Ｆ121 講義室）

３）研修内容：講演「大学体育における野外教育の位置づけ」

講　　師　柳　敏晴（鹿屋体育大学）

シンポジウム　「大学体育における野外教育の可能性を探る」

シンポジスト　柳　敏晴（鹿屋体育大学）

山本　教人（九州大学）

宇部　一（精華女子短期大学）

「体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」春季研修会の概要

１）開催期日：平成12年３月９日（木）～10日（金）

２）会　　場：佐賀・川上峡龍登園

３）研修内容：

(1) 特別講演

『マンガ的ものの見方、考え方』と『合気道、和の心』

針　すなお　先生（漫画家）

(2) 特別講義

『ティーチング・ポートフォリオ』　－日本的大学風土への可能性－

杉本　　均　先生（京都大学）

(3) シンポジウム

「小学校・高等学校の体育授業から見えてくるもの」

(1) 松雪　　誉　先生（高志館高等学校）

(2) 藤井　裕明　先生（若木小学校）

(4) 一般研究発表

(1) 体育授業における心理的効果に関する研究

橋本　公雄（九州大学・健康科学センター）

(2) 大学体育におけるアルティメット実践　－大学生の学び－

中島　憲子（中村学園大学・短期大学部）

(3) 体育学書研究のキーワードに見る

「今後の大学一般体育を支えるいくつかの概念」

― 文献研究による模索は我々の教育活動に明確かつ有力な視点を投げかけ得るか ―

道向　　良（活水女子短期大学）

(4) 組織キャンプ体験はメンタルヘルスを高めるか？

西田　順一（九州大学）

(5) 健康科学講義へのリベート式授業の試み

磯貝　浩久（九州工業大学）

春季研修会参加の感想

福岡教育大学　榊　原　浩　晃

過日、平成11年度九州地区大学体育連合春季研修会（平成12年３月９日、10日　佐賀：竜登園）のお誘いを受けた。この研修会は、ご案内には「体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」とも紹介されており、大会テーマは「大学改革と大学体育の貢献性 Part Ⅲ」とタイトルも付され、参加前にしてこの研修会にかかわってこられた九州の各大学の先生方の熱心な取り組みを予感させた。とりわけ、理事長として九州地区大学体育連合をまとめてこられた市川孝夫先生（産業医科大学）のご尽力に対しても敬意を表し、私と同じ職場の市丸直人先生と共に参加した。

私は、３年前に福教大へ赴任した新参者である。がしかし、研修会全体を通してのその率直な印象を先取りすれば、中央（首都圏）にも勝るとも劣らず、そして「九州は一体感があるものだなあ」ということが言えそうである。研修会の企画や内容はどれも、今回の参加者を満足させるものであったに相違ない。九州の地で大学体育にかかわる私どもが、共に思案し、実践し、議論を重ね、2000年に新たな一歩を踏み出すのにふさわしい企画であった。

一般研究発表は、両日共行われ、どの発表も発表された先生方の周到な準備と熱心なフロアーの参加者の姿勢とがマッチングしていたように思える。紙幅の関係で個々報告は、割愛をお許しいただきたい。

この研修会の感想を述べるのに、まず第一は、漫画家で「NHK の日本人の質問」の似顔絵漫画家で知られる針　すなお氏の「マンガ的なものの見方と考え方と合気道、和の心」と題する特別講演があげられてよかろう。漫画家として、他人のまねのできないもの、つまり自己の個性を最大限に打ち出す氏の創作活動の真髄は、オリジナリティーや研究の新しさを追求する我々の研究姿勢とも相通じるものがあるのではないかとも感じた。一方で、氏は合気道を実践する武道家として自らの道場を持ち、門下生約100名を擁しているという。氏は「武道はものまねからはじまり、そしてやがては自分のものになっていく」と説く。「良い作品と良いできばえ」という講演最後にしての氏の言葉が、文武両道ともいえる、それだけの道を究める極意が含まれているような気がした。奥深い熱心な話しぶりにいつしか、時間も忘れていたような気がする。

特別講義は「ティーチング・ポートフォリオ ── 日本的大学風土への可能性 ── 」と題して京都大学から杉本　均先生をお迎えした。ある意味で、アメリカ的高等教育の概念を平易に解説して下さったようで、今後の大学体育にとっても必要不可欠な要点をご教示していただいた。私の理解では、研究業績と同じく教育業績をどのように記録化し、大学や教員評価の有効なデータとして活用し得るかを具体例をあげて講義して下さったものとふりかえっている。さらに、後日、『平成８～９年度科学研究費補助金研究成果報告書　ティーチング・ポートフォリオと大学授業改善の研究』の冊子をご送付いただいた。（市丸直人先生宛）こうしたティーチング・ポートフォリオを、大学体育に携わる我々も念頭に置かねばならない時代になったことを痛感した。それだけに研修会の内容として好企画であった。

シンポジウムとして、「小学校・高等学校の体育授業から見えてくるもの」高校編として、佐賀県立高志館高等学校の松雪　誉先生は、選択制体育授業実施の一端をご報告して下さった。グループ学習ノートの活用によって、生徒が率先して体育授業で運動しており、学習態度や技能上達に関する生徒自らの自己評価に至るまでの学習活動は、大学体育で学生を１時間運動させるのに苦心している現状を再考させる刺激となった気がする。同様に、武雄市立若木小学校の藤井裕明先生のご報告は、小学校体育の授業の目標レベルの設定の仕方をじつにうまく工夫しておられ、感動的な授業シーンをビデオで視聴することができた。そして、学習過程のとして「チクセントミハイの遊びの楽しさのフローモデル」を理論背景に置いておられることも感心させられた。

以上、研修会への参加の本来の意味は、take part in であるはずであるから、研修会への参加は、ただ単に会場に足を運ぶことだけを意味しない。参加者一人一人の感じるところは、人それぞれであろう。それゆえ参加者の１人として私がこの研修会から学び得たことの一端を私見として述べさせていただいたに過ぎない。

春季研修会を終えて

佐賀大学　井上伸一

６年前、佐賀大学に赴任してまたそれほど月日も経たない頃、体育連合佐賀県理事を命ぜられた。いったいどういう組織なのかよく把握できない状態のまま、年に数回行われる会議のため九大へかようこととなる。

継続して２期目を要請されたときには、会議に出ていくのが正直おっくうではあるけれど、研修会はそれぞれの地域で魅力的な内容が趣向されおもしろかったし、なによりも他大学との交流を交わす術を持たない自分にとっては、九州の先生方と知りあえる場としていい機会であると思い了承した。そしてその時点では、春季研修会の佐賀県の順番は任期を終えた後であるというしたたかな計算もあった。

しかしそれは自分のあさはかな勘違い、任期の最後に回ってくることを知ったのは前々回の鹿児島での研修会に関する会議の時である。それから２年あまり、頭の隅にある研修会開催のストレッサーが日を追うに連れて周期を早ませながら私の消化器官を刺激することとなる。さらに、過去の研修会の成功が脳裏をよぎる。鹿児島市街の夜景のかなたにうっすらと姿を漂わす桜島を拝みながらの露天風呂や、夜逃げの町宮崎県綾町からの奇跡的な復興を語った前町長の熱弁は私のプレッシャーをさらに助長させていった。

当番大学の事前の役割は、簡単にいうと研修施設の選定、特別講義、特別講演のテーマ及び演者の決定である。研修会は佐賀市周辺で行うこととし、共済施設や学会等で利用されているホテルをいくつか訪ねたが、なかなかこちらの要望にかなった、つまり安くていい会場は見つけられなかった。実際に会場となった龍登園は佐賀では老舗のホテル、ほとんど期待しないでホテルを訪ねると、こちらの要求を始めからすべて飲んでくれた。後から心配になって、「朝食付きでいいんですよね」「サービス税も含めてこの値段ですよね」としばしば確認の電話を入れ、担当者には煙たがれてしまったこともあった。

会場に関してはうれしい誤算、予想以上の施設が確保できたが問題なのは研修内容、どういう人材を講師としてこちらで準備できるかである。

企画内容に関しては漠然とではあったがひとつの考えがあった。このところの大学体育のおかれた状況を反映して、少なくとも私が本連合に参加してからは、大学行政に関わる講義が非常に多かったように思う。そこで今回は授業に関わった、日頃の講義あるいは実習をより充実するための一助となるような企画ができればとの想いがあった。私自身、学生がもっと自主的に参加できるような授業の運営、あるいは形態を模索していたこともその理由のひとつである。そんなおり「どのようにして授業を魅力的なものにするかということに関しては小中高校の先生の方がずっと工夫を凝らしている」という教科教育の先生の話を耳にして、今回の企画「小学校、高等学校の体育授業から見えてくるもの」となった。事前の会議においてこの内容は特別講義よりもシンポジウムの方がふさわしいということで、かわりに特別講義に関しては事務局が用意することとなったが、理事会でもこの企画に関して賛同を得ることができた。

問題は特別講演の演者である。体育関係者となれば人選も楽なのであろうが、過去の顔ぶれを見ると、いずれも体育とは直接的には関係ない、いわゆる地元の名士と呼ばれる方々である。適当な人が見つからず気を揉んでいた頃、ある居酒屋に入ってふと目に入った見慣れた画風の似顔絵。聞けば漫画家の針すなお先生がちょくちょく来られるとのことであった。以前、これも個人的な興味で合気道の資料を取り寄せた際に、佐賀道場の師範が針先生であることを思い出した。日頃、新聞、テレビで活躍されている漫画家として、また大学体育関係者にはあまりなじみのない合気道の専門家としてこの先生にお話してもらえればとてもおもしろいのではないか、さっそくその翌日から針先生との伝手を探し始めた。幸いわれわれの講座の先生の協力を得て、講演を快く引き受けていただいた。

以上のような経緯でなんとか研修会を開催することができた。研修中は佐賀県の先生方の多大な協力を得て、滞りなくスケジュールを進めることができたことに感謝している。それぞれの企画に関しては担当の先生の論評に任せるとするが、参加者の皆さんの記憶に残る研修会であったならば幸いである。